のことから「シンプレックス」の性質がSSAの技法をとおして視覚的にも捉えられたといえるのである。

さて、では、仮説的図式に示した「居住・所属エリア愛着感」以外の諸変数群についてはどうなのであろうか。ここでそのすべてについての検討の過程を示すだけの紙面の余裕はない。そこで、その結果だけを述べておくならば、この「居住・所属エリアへの愛着感」とちょうど反対の極にある「居住・所属エリアからの移転・移住志向」を除くならば、それ以外の諸変数群については、そのままの形ではそれぞれの諸変数はGuttman Scaleを構成するものとはなっていない。しかし、厳密な意味ではGuttman Scaleを構成していないにしても、それぞれの諸変数群を尺度化することは可能である。以下では、このように各々の諸変数群を尺度化した上で、それら尺度間の関係についての検討を進めていきたい。

ただ、あらゆる技法にはプラスとマイナスの二つの側面がある。尺度化についても、それによって、①特定の質問項目を個別に用いる場合に生じる偏より（bias）を是正することができる、②各々の質問項目を個別に用いる場合の繁雑さを解消することができる、というプラスの面とともに、それによって質問一問一問の回答をそのまま用いる場合のそれぞれに固有の差異が見えなくなってしまう、というマイナスの面もある。

3．ナショナル・アイデンティティの尺度構成と各尺度間の関係の分析

尺度の構成の手順はつぎのとおりである。

(1)今回の調査の質問諸項目の回答の選択肢のカテゴリーは4分法、2分法、5分法の三種類となっているので、それぞれで点数のあたえ方が異なる。

①4分法の場合：

たとえば、

(ア)とても愛着がある
(イ)まあ愛着がある　} → 1点

(ウ)あまり愛着がない
(エ)まったく愛着がない　} → 0点

(オ)わからない
無回答　} → missing value

②2分法の場合：

たとえば、

(ア)どんなことがあっても一つの国であり続けるべきだ　} → 1点

(イ)一部の地域が独立して別の国になってもよい　} → 0点

(ウ)わからない
無回答　} → missing value

⑤5分法の場合：

たとえば、

(ア)そう思う
(イ)どちらかといえばそう思う　} → 2点

(ウ)どちらともいえない　} → 1点

(エ)どちらかといえばそう思わない
(オ)そう思わない　} → 0点

(カ)わからない
無回答　} → missing value

(2)回答者一人一人に以上のような点数をあたえ、それぞれの尺度ごとの「平均値」を算出する。

さて、このような「平均値」を各国ごとに算出し、その数値にもとづいて各国の尺度上での位置を比較検討するという試みもきわめて興味深い課題といわなければならない（NHK放送文化研究所『放送研究と調査』に発表予定）。しかし、ここでは、ナショナル・アイデンティティの構造という問題関心の線上での分析を進めていきたい。それは以上で作成した尺度間の相互の関係の分析——相関分析——ということである。

つぎの「相関マトリックス」（表4）から、はじめに提示したこの調査の質問諸項目の実質的内容の吟味にもとづく「仮説的図式」が妥当なものであったことがわかる。それは、具体的にいえば、つぎのような点から導き出されるのである。

①「エリア愛着感尺度」「エリア定着志向尺度」「国の一体性志向尺度」「国民の条件意識尺度」「国意識尺度」「国に対する誇り尺度」「自民族愛着感尺度」の七つの尺度の相互間の関係については、その相関係数の「符号」はいずれもプラスであり、その数値の「大きさ」は四捨五入して0.2以上とな